

## 高齢期の眼科疾患：白内障について

### Eye Disease in Old Age: Cataracts

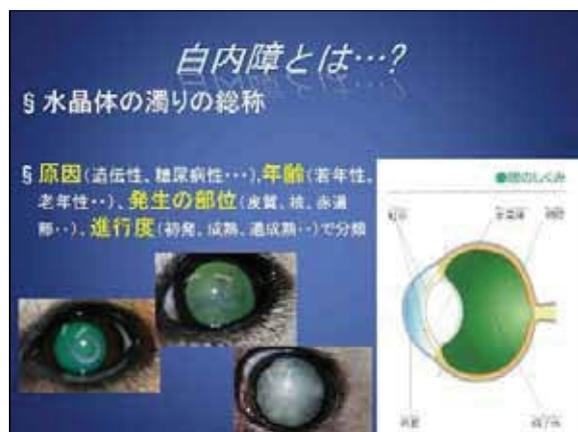
山下真 ファーブル動物病院 眼科 獣医師

Makoto YAMASHITA Veterinarian at Fabre Animal Hospital, Ophthalmology



近年ペットの高齢化に伴い、高齢期に入った犬の眼科疾患の相談件数が増加している。白内障はその中でも遭遇することの多い疾患のひとつである。ペットオーナーは“眼の濁り”として気づくことが多く、しばしば家庭や散歩での行動の変化を伴っている。緑内

ど)。一方、老齢期（6歳以降）では進行が遅いのが一般的であるが時として急速に進行するものも認められる。犬の高齢期白内障では遺伝性以外にも全身性疾患が関連していることも多く、特に糖尿病などがある。糖尿病以外の内分泌疾患、肝臓や腎臓疾患、感染症なども白内障の原因となる。また網膜変性（網膜が萎縮して機能なくなる疾患）など他の眼科疾患からも白内障が発生することが多い。従って高齢期に白内障が見られた場合、眼の検査はもちろん全身の検査も積極的に行う必要がある。【スライド1】

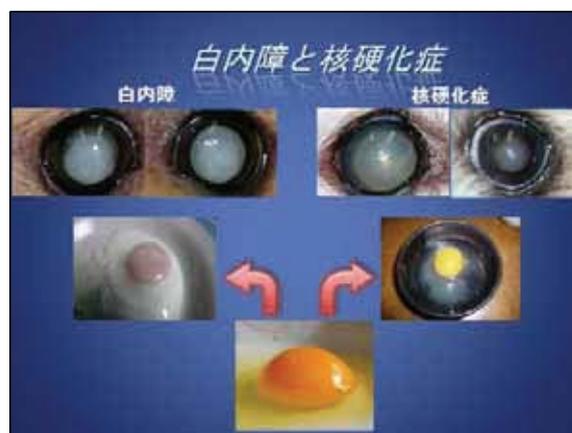


【スライド1】

障や網膜剥離などの急激な視覚の変化を伴う病気とは異なり、一般的に白内障は症状の進行が遅いため行動異常が現れるのはかなり遅れて、ということが多い。今回はこの“犬の白内障”という疾患をフォーカスして説明をしたい。

眼球内にある水晶体(=レンズ)が何らかの原因によって濁ったものの総称である(図1)。水晶体はカメラのレンズに該当する部分であり、この部分に濁りが生じると光がうまく通過できなくなり、眼の中で光が乱反射を起こして眩しくなったり、遠近調節が効かなくなったりする。白内障の症状は多様で、年齢、性格、生活環境によって視覚障害の程度が変わる。一般的には行動が慎重になったり、階段の昇り降りができなくなったり、また昼と夜の行動に差が出たりすることが多い。

白内障では発症時の年齢、発生部位、進行の程度により鑑別を行い診断名がつけられる(例:若齢性未成熟皮質白内障など)(図1)。犬の白内障では人の原因同様老齢性白内障も見られるが、一般的には若齢期に発生する遺伝性白内障が最も多い。若齢性白内障は一般的に進行が極めて早く、またしばしば眼の中の炎症(ブドウ膜炎)を伴うため、合併症の発生が多い(緑内障、網膜剥離な

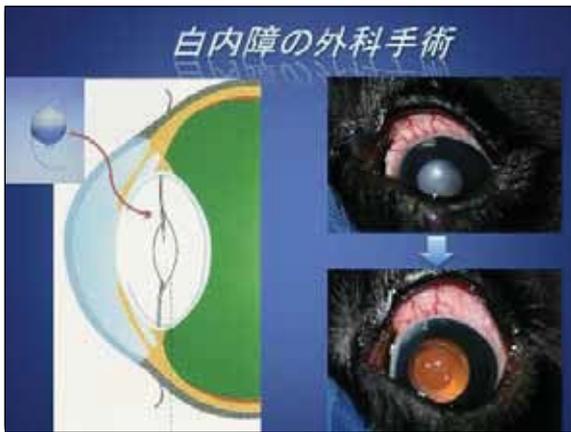


【スライド2】

動物の場合白内障には“治療を必要とする白内障”と、“治療の必要がない白内障”がある。特に後者は“核硬化”と呼ばれ、加齢性変化による水晶体の濁りを言う。核硬化は水晶体全体がぼんやりと濁るが、真性の白内障と違い視覚を失うことはないため、動物の領域では眼の病気として扱うことは少ない。

白内障に気づいた場合、できるだけ早く主治医に受診することをお勧めする。一般の動物病院でも充分検査が可能であるが、眼科の検査のための専門的な機材を持ち合わせていない病院であればさらに専門の病院に紹介してもらうようにする必要がある。【スライド2】

一度濁ってしまった水晶体の透明性を元に戻す“内科的治療”はない。濁りによって侵害された視力の改善ができるのは現在のところ手術しかない。動物の場合は先に述べたように遺伝的要因をもった若齢性白内障が多いが、一方高齢期の白内障では、全身疾患や加齢に伴って体に蓄積していく“錆”も白内障を進行させる要因となる。この“錆”は活性酸素やフリーラジカルと呼ばれ、



【スライド 3】



【スライド 5】



【スライド 4】



【スライド 6】

眼の中では特に水晶体や網膜に障害を引き起こす。この“鏽”に対して現在種々のサプリメントが動物用医薬品として開発販売されている。また点眼によってもある程度の“鏽”の抑制が可能と考えられているが、いずれも白内障を治療するものではなくあくまで進行の抑制という認識で投与を行うことが重要である。【スライド 3】

白内障の手術を検討するにあたり、まず手術を行うことで本当に視力の改善が可能か検査をする必要がある。例えば網膜剥離や、網膜が変性するような疾患が既に存在する場合には残念ながら手術の適応にならない。動物の眼内手術は人のように局所麻酔の点眼で行うことはできず、必ず全身麻酔が必要になるため、全身の検査を行い麻酔に支障がないかを事前に調べる必要もある。

手術は人と同じ方法で行う。近年では眼の上側、白眼と黒眼の境目を 3mm 強ほど切るだけで手術が可能である。超音波の器具によって白内障を壊して吸引する方法である。濁った部分を取り除いた後、犬専用の人工レンズ (IOL) (図 4) を水晶体の中に入れ、縫合して終了となる。近年では人工レンズを挿入することは普通になり、術後の視力の改善は劇的に良くなっている (図 5)。手術終了後からは目薬を 2~3 ヶ月続けなければならないが、術後炎症や眼圧が安定すれば以前同様元気に散歩にでかけ、遊ぶことができる。【スライド 4】

最後に、犬と人では白内障の原因が異なり進行も早い。ため、眼の中に“濁り”を感じた場合にはすぐに主治医に相談をすることが大事である。特に高齢期の犬の白内障は全身の病気と関係することも多いため、日常生活の中で眼の症状以外に何か変化が見られないかを注意していただくことも重要である (例：常にお腹を空かせている、飲水量が異常に増えている、尿量が増えている、脱毛が多い、体重の増減が激しい・・・)。

濁った水晶体を綺麗に元通りにする目薬や飲み薬はないため、進行して視力障害が見られた場合には早期に治療を行う必要がある。異常を感じた場合にはできるだけ早く主治医に相談をしていただき、その病院で手術が不可能であれば白内障手術ができる病院を紹介してもらう。残念ながら動物の領域では白内障の手術を行う施設は多くはないが、近年の白内障手術の成功率は飛躍的に高くなっており、積極的に相談されることをお勧めしたい。